

1

解答解説のページへ

座標平面上にすべての内角が 180° 未満の四角形 $ABCD$ がある。原点を O とし、 $\overrightarrow{OA} = \vec{a}$, $\overrightarrow{OB} = \vec{b}$, $\overrightarrow{OC} = \vec{c}$, $\overrightarrow{OD} = \vec{d}$ とおく。 k は $0 \leq k \leq 1$ を満たす定数とする。0

以上の実数 s, t, u が $k + s + t + u = 1$ を満たしながら変わるとき

$$\overrightarrow{OP} = k\vec{a} + s\vec{b} + t\vec{c} + u\vec{d}$$

で定められる点 P の存在範囲を $E(k)$ とする。

(1) $E(1)$ および $E(0)$ を求めよ。

(2) $E\left(\frac{1}{3}\right)$ を求めよ。

(3) 対角線 AC, BD の交点を M とする。どの $E(k)$ ($\frac{1}{3} \leq k \leq \frac{1}{2}$) にも属するような点

P を考える。このような点 P が存在するための必要十分条件を、線分 AC, AM の長さを用いて答えよ。

2

解答解説のページへ

数直線上の点 Q は、はじめは原点 $x=0$ にあり、さいころを投げるたびに以下のルールに従って移動する。 Q が $x=a$ にあるとき、

- ・ 出た目が 1 ならば $x=a$ にとどまる。
- ・ 出た目が 2, 3 ならば $x=a+1$ へ動く。
- ・ 出た目が 4, 5, 6 ならば $x=0$ に戻る ($a=0$ ならば動かない)。

- (1) 整数 $a \geq 0$ に対して、さいころを 3 回投げたとき、 Q が $x=a$ にある確率を求めよ。
- (2) さいころを n 回投げたとき、 Q が $x=0$ にある確率を求めよ。
- (3) さいころを n 回投げたとき、 Q が $x=1$ にある確率を求めよ。

3

解答解説のページへ

$z = \cos \frac{2\pi}{7} + i \sin \frac{2\pi}{7}$ (i は虚数単位) とおく。

- (1) $z + z^2 + z^3 + z^4 + z^5 + z^6$ を求めよ。
- (2) $\alpha = z + z^2 + z^4$ とするとき, $\alpha + \bar{\alpha}$, $\alpha \bar{\alpha}$ および α を求めよ。ただし, $\bar{\alpha}$ は α の共役複素数である。
- (3) $(1-z)(1-z^2)(1-z^3)(1-z^4)(1-z^5)(1-z^6)$ を求めよ。

4

解答解説のページへ

曲線 $C: y = \sin x$ 上を点 $P(t, \sin t)$ ($0 \leq t \leq \frac{\pi}{2}$) が動く。正の実数 r に対して、 P における C の接線上に $PQ = r$ となるように点 Q をとる。ただし、 Q の x 座標は t よりも大きいとする。

- (1) Q の座標を求めよ。
- (2) $t = \frac{\pi}{4}$ のときに Q の y 座標が最大となるような r の値を求めよ。

5

解答解説のページへ

p を 2 でない素数とし, 自然数 m, n は, $(m+n\sqrt{p})(m-n\sqrt{p})=1$ を満たすとする。

- (1) 互いに素な自然数の組 (x, y) で, $m+n\sqrt{p} = \frac{x+y\sqrt{p}}{x-y\sqrt{p}}$ を満たすものが存在する

ことを示せ。

- (2) x は(1)の条件を満たす自然数とする。 x が p で割り切れないことと, m を p で割った余りが 1 であることが, 同値であることを示せ。

1

問題のページへ

- (1) 原点 O , 四角形 $ABCD$ に対し, $\overrightarrow{OA} = \vec{a}$, $\overrightarrow{OB} = \vec{b}$, $\overrightarrow{OC} = \vec{c}$, $\overrightarrow{OD} = \vec{d}$ とおく。定数 k は $0 \leq k \leq 1$, 0 以上の実数 s, t, u は $k + s + t + u = 1$ を満たす。

そして, $\overrightarrow{OP} = k\vec{a} + s\vec{b} + t\vec{c} + u\vec{d}$ で定められる点 P の存在範囲を $E(k)$ とする。

まず, $k=1$ のとき $s+t+u=0$ から $s=t=u=0$ より, $\overrightarrow{OP} = \vec{a}$ となる。すなわち, $E(1)$ は点 A である。

次に, $k=0$ のとき $s+t+u=1$ から $s \geq 0, t \geq 0, u = 1-s-t \geq 0$ となり,

$$\overrightarrow{OP} = s\vec{b} + t\vec{c} + (1-s-t)\vec{d}, \quad \overrightarrow{OP} - \vec{d} = s(\vec{b} - \vec{d}) + t(\vec{c} - \vec{d})$$

$$\overrightarrow{DP} = s\overrightarrow{DB} + t\overrightarrow{DC} \quad (s \geq 0, t \geq 0, s+t \leq 1)$$

よって, $E(0)$ は $\triangle DBC$ の内部または辺上となる。

- (2) $k = \frac{1}{3}$ のとき, $s+t+u = \frac{2}{3}$ から $s \geq 0, t \geq 0, u = \frac{2}{3} - s - t \geq 0$ となり,

$$\overrightarrow{OP} = \frac{1}{3}\vec{a} + s\vec{b} + t\vec{c} + \left(\frac{2}{3} - s - t\right)\vec{d}, \quad \overrightarrow{OP} - \frac{\vec{a} + 2\vec{d}}{3} = s\overrightarrow{DB} + t\overrightarrow{DC}$$

ここで, $\overrightarrow{DQ} = s\overrightarrow{DB} + t\overrightarrow{DC}$ とおき, DB, DC を $2:1$ に内分する点を, それぞれ F_1, G_1 とすると,

$$\overrightarrow{DQ} = \frac{3}{2}s\overrightarrow{DF_1} + \frac{3}{2}t\overrightarrow{DG_1} \quad (s \geq 0, t \geq 0, \frac{3}{2}s + \frac{3}{2}t \leq 1)$$

これより, 点 Q は $\triangle DF_1G_1$ の内部または辺上にある。

さらに, AD, AB, AC を $2:1$ に内分する点を, それぞれ

H_1, I_1, J_1 とおくと, $\overrightarrow{DF_1} = \overrightarrow{H_1I_1}, \overrightarrow{DG_1} = \overrightarrow{H_1J_1}$ から,

$$\overrightarrow{OP} - \overrightarrow{OH_1} = \overrightarrow{DQ}, \quad \overrightarrow{H_1P} = \frac{3}{2}s\overrightarrow{H_1I_1} + \frac{3}{2}t\overrightarrow{H_1J_1} \quad (s \geq 0, t \geq 0, \frac{3}{2}s + \frac{3}{2}t \leq 1)$$

よって, $E\left(\frac{1}{3}\right)$ は $\triangle H_1I_1J_1$ の内部または辺上となる。

- (3) (2) と同様にして, $s+t+u = 1-k$ から $s \geq 0, t \geq 0, u = 1-k-s-t \geq 0$ となり,

$$\overrightarrow{OP} = k\vec{a} + s\vec{b} + t\vec{c} + (1-k-s-t)\vec{d}, \quad \overrightarrow{OP} - \{k\vec{a} + (1-k)\vec{d}\} = s\overrightarrow{DB} + t\overrightarrow{DC}$$

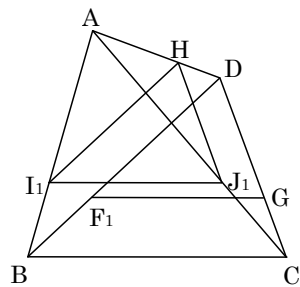
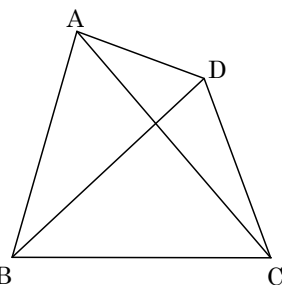
ここで, AD, AB, AC を $1-k:k$ に内分する点を, それぞれ H, I, J とおくと,

$$\overrightarrow{OP} - \overrightarrow{OH} = \overrightarrow{DQ}, \quad \overrightarrow{HP} = \frac{s}{1-k}\overrightarrow{HI} + \frac{t}{1-k}\overrightarrow{HJ} \quad (s \geq 0, t \geq 0, \frac{s}{1-k} + \frac{t}{1-k} \leq 1)$$

よって, $E(k)$ は $\triangle HIJ$ の内部または辺上となる。

さて, $k = \frac{1}{2}$ のとき, AD, AB, AC の中点を, それぞれ H_2, I_2, J_2 とおくと,

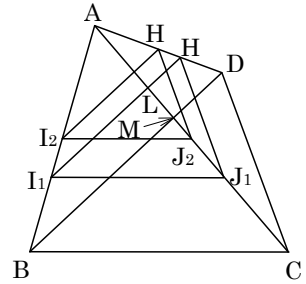
$E\left(\frac{1}{2}\right)$ は $\triangle H_2I_2J_2$ の内部または辺上となる。



すると、 $\frac{1}{3} \leq k \leq \frac{1}{2}$ において、どの $E(k)$ にも属するよ
 うな点 P が存在する条件は、 $E\left(\frac{1}{3}\right)$ と $E\left(\frac{1}{2}\right)$ に共通部分
 が存在することである。すなわち、対角線 AC, BD の交点
 を M , AC と H_1I_1 の交点を L とすると、

$$AJ_2 \geq AL, \quad \frac{1}{2}AC \geq \frac{2}{3}AM$$

よって、求める条件は、 $3AC \geq 4AM$ である。



[解説]

平面ベクトルと領域に関する問題です。解答例が書きにくいタイプで、やや冗長な
 感じもします。また、丁寧な誘導のため、後半になるに従い省略ぎみに記しましたが、
 それでもボリュームはかなりのものとなっています。

2

問題のページへ

(1) さいころを3回投げ Q が $x = a$ にある確率を、 a の値で場合分けをして求める。(i) $a \geq 4$ のとき到達点は $a \leq 3$ なので、このときの確率は0である。(ii) $a = 3$ のとき $0 \rightarrow 1 \rightarrow 2 \rightarrow 3$ の場合のみより、このときの確率は $\left(\frac{1}{3}\right)^3 = \frac{1}{27}$ である。(iii) $a = 2$ のとき $0 \rightarrow 0 \rightarrow 1 \rightarrow 2$, $0 \rightarrow 1 \rightarrow 1 \rightarrow 2$, $0 \rightarrow 1 \rightarrow 2 \rightarrow 2$ の場合があり、これらの確率はそれぞれ $\frac{2}{3} \cdot \frac{1}{3} \cdot \frac{1}{3} = \frac{2}{27}$, $\frac{1}{3} \cdot \frac{1}{3} \cdot \frac{1}{3} = \frac{1}{54}$, $\frac{1}{3} \cdot \frac{1}{3} \cdot \frac{1}{3} = \frac{1}{54}$ である。よって、このときの確率は $\frac{2}{27} + \frac{1}{54} + \frac{1}{54} = \frac{1}{9}$ である。(iv) $a = 1$ のとき $0 \rightarrow 0 \rightarrow 0 \rightarrow 1$, $0 \rightarrow 0 \rightarrow 1 \rightarrow 1$, $0 \rightarrow 1 \rightarrow 0 \rightarrow 1$, $0 \rightarrow 1 \rightarrow 1 \rightarrow 1$ の場合があり、これらの確率はそれぞれ $\frac{2}{3} \cdot \frac{2}{3} \cdot \frac{1}{3} = \frac{4}{27}$, $\frac{2}{3} \cdot \frac{1}{3} \cdot \frac{1}{3} = \frac{1}{27}$, $\frac{1}{3} \cdot \frac{1}{2} \cdot \frac{1}{3} = \frac{1}{18}$, $\frac{1}{3} \cdot \frac{1}{6} \cdot \frac{1}{6} = \frac{1}{108}$ である。よって、このときの確率は $\frac{4}{27} + \frac{1}{27} + \frac{1}{18} + \frac{1}{108} = \frac{1}{4}$ である。(v) $a = 0$ のときこのときの確率は、(i)~(iv)の結果から、 $1 - \frac{1}{27} - \frac{1}{9} - \frac{1}{4} = \frac{65}{108}$ である。(2) さいころを n 回投げ、 Q が $x = 0$, $x \neq 0$ にある確率をそれぞれ p_n , q_n とおくと、

$$p_{n+1} = \frac{2}{3}p_n + \frac{1}{2}q_n = \frac{2}{3}p_n + \frac{1}{2}(1-p_n) = \frac{1}{6}p_n + \frac{1}{2}$$

すると、 $p_{n+1} - \frac{3}{5} = \frac{1}{6}\left(p_n - \frac{3}{5}\right)$ となり、 $p_1 = \frac{2}{3}$ から、

$$p_n - \frac{3}{5} = \left(p_1 - \frac{3}{5}\right)\left(\frac{1}{6}\right)^{n-1} = \left(\frac{2}{3} - \frac{3}{5}\right)\left(\frac{1}{6}\right)^{n-1} = \frac{1}{15}\left(\frac{1}{6}\right)^{n-1}$$

よって、 $p_n = \frac{1}{15}\left(\frac{1}{6}\right)^{n-1} + \frac{3}{5}$ である。(3) さいころを n 回投げ、 Q が $x = 1$ にある確率を r_n とおくと、 $r_1 = \frac{1}{3}$ で、(2)から、

$$r_{n+1} = \frac{1}{3}p_n + \frac{1}{6}r_n = \frac{1}{6}r_n + \frac{1}{45}\left(\frac{1}{6}\right)^{n-1} + \frac{1}{5}$$

すると、両辺に 6^n をかけて、 $6^n r_{n+1} = 6^{n-1} r_n + \frac{2}{15} + \frac{1}{5} \cdot 6^n$ となり、 $n \geq 2$ で、

$$\begin{aligned} 6^{n-1} r_n &= 6^0 r_1 + \sum_{k=1}^{n-1} \left(\frac{2}{15} + \frac{1}{5} \cdot 6^k\right) = \frac{1}{3} + \frac{2}{15}(n-1) + \frac{1}{5} \cdot \frac{6(6^{n-1}-1)}{6-1} \\ &= \frac{2}{15}n + \frac{1}{25} \cdot 6^n - \frac{1}{25} \end{aligned}$$

$$r_n = \frac{2}{15}n \left(\frac{1}{6}\right)^{n-1} + \frac{6}{25} - \frac{1}{25} \left(\frac{1}{6}\right)^{n-1} = \left(\frac{2}{15}n - \frac{1}{25}\right)\left(\frac{1}{6}\right)^{n-1} + \frac{6}{25}$$

$n=1$ をあてはめると, $r_1 = \frac{2}{15} - \frac{1}{25} + \frac{6}{25} = \frac{1}{3}$ となり成立するので,

$$r_n = \left(\frac{2}{15}n - \frac{1}{25} \right) \left(\frac{1}{6} \right)^{n-1} + \frac{6}{25}$$

[解説]

設定が微妙に複雑な確率の問題です。(1)では、記述を省略しましたが、樹系図を書いて数えもれのチェックをしています。また、(2)は直接的に求めようかとも思いましたが、無難な漸化式という方針を採用しました。また、(3)は(2)の結果を利用しましたが、漸化式がやや複雑なタイプです。詳しくは「ピンポイントレクチャー」を参照してください。

3

問題のページへ

(1) $z = \cos \frac{2\pi}{7} + i \sin \frac{2\pi}{7}$ に対して, $z^7 = \cos 2\pi + i \sin 2\pi = 1$ となり,

$$z + z^2 + z^3 + z^4 + z^5 + z^6 = \frac{z(z^6 - 1)}{z - 1} = \frac{z^7 - z}{z - 1} = \frac{1 - z}{z - 1} = -1$$

(2) $\alpha = z + z^2 + z^4$ とするとき, $\bar{\alpha} = \bar{z} + \bar{z}^2 + \bar{z}^4 = z^6 + z^5 + z^3$

$$\alpha + \bar{\alpha} = z + z^2 + z^4 + z^6 + z^5 + z^3 = -1$$

$$\alpha \bar{\alpha} = (z + z^2 + z^4)(z^6 + z^5 + z^3)$$

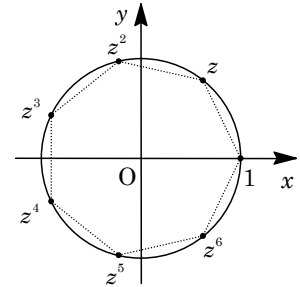
$$= z^7 + z^6 + z^4 + z^8 + z^7 + z^5 + z^{10} + z^9 + z^7$$

$$= 3 + z^6 + z^4 + z + z^5 + z^3 + z^2$$

$$= 3 - 1 = 2$$

よって, $\alpha, \bar{\alpha}$ は 2 次方程式 $x^2 + x + 2 = 0$ の解より,

$$x = \frac{-1 \pm \sqrt{7}i}{2}$$



そして, α の虚部は $\bar{\alpha}$ の虚部より大きいので, $\alpha = \frac{-1 + \sqrt{7}i}{2}$ である。

(3) $x^7 = 1$ の解は, $x = 1, z, z^2, z^3, z^4, z^5, z^6$ より,

$$x^7 - 1 = (x - 1)(x - z)(x - z^2)(x - z^3)(x - z^4)(x - z^5)(x - z^6)$$

そして, $x^7 - 1 = (x - 1)(x^6 + x^5 + x^4 + x^3 + x^2 + x + 1)$ より,

$$x^6 + x^5 + x^4 + x^3 + x^2 + x + 1$$

$$= (x - z)(x - z^2)(x - z^3)(x - z^4)(x - z^5)(x - z^6) \cdots \cdots (*)$$

(*)に $x = 1$ を代入すると,

$$(1 - z)(1 - z^2)(1 - z^3)(1 - z^4)(1 - z^5)(1 - z^6) = 7$$

[解説]

1 の n 乗根に関する超有名問題です。解答例に示した図がすべてと言っても構わない内容です。

4

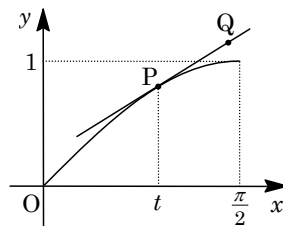
問題のページへ

- (1) $C: y = \sin x$ に対して $y' = \cos x$ なので, $P(t, \sin t)$ における接線方向ベクトルで, x 成分が正のものを, $\vec{u} = (1, \cos t)$ とおくことができる。

すると, $|\vec{u}| = \sqrt{1 + \cos^2 t}$ で, 条件から $PQ = r$ なので,

$$\vec{OQ} = \vec{OP} + \vec{PQ} = (t, \sin t) + \frac{r}{\sqrt{1 + \cos^2 t}}(1, \cos t)$$

よって, $Q\left(t + \frac{r}{\sqrt{1 + \cos^2 t}}, \sin t + \frac{r \cos t}{\sqrt{1 + \cos^2 t}}\right)$ となる。



- (2) Q の y 座標を $f(t)$ とおくと, $f(t) = \sin t + \frac{r \cos t}{\sqrt{1 + \cos^2 t}}$ となり,

$$\begin{aligned} f'(t) &= \cos t + r \cdot \frac{-\sin t \sqrt{1 + \cos^2 t} + \cos t \cdot (1 + \cos^2 t)^{-\frac{1}{2}} \cos t \sin t}{1 + \cos^2 t} \\ &= \cos t + r \cdot \frac{-\sin t (1 + \cos^2 t) + \sin t \cos^2 t}{(1 + \cos^2 t)^{\frac{3}{2}}} = \frac{\cos t (1 + \cos^2 t)^{\frac{3}{2}} - r \sin t}{(1 + \cos^2 t)^{\frac{3}{2}}} \end{aligned}$$

さらに, $g(t) = \cos t (1 + \cos^2 t)^{\frac{3}{2}} - r \sin t$ とおくと,

$$\begin{aligned} g'(t) &= -\sin t (1 + \cos^2 t)^{\frac{3}{2}} - \cos t \cdot \frac{3}{2} (1 + \cos^2 t)^{\frac{1}{2}} \cdot 2 \cos t \sin t - r \cos t \\ &= (-1 - \cos^2 t - 3 \cos^2 t) \sin t (1 + \cos^2 t)^{\frac{1}{2}} - r \cos t \\ &= -\sin t (1 + 4 \cos^2 t) (1 + \cos^2 t)^{\frac{1}{2}} - r \cos t < 0 \end{aligned}$$

これより, $g(t)$ は $0 \leq t \leq \frac{\pi}{2}$ で単調減少し, $g(0) = 2\sqrt{2} > 0$, $g\left(\frac{\pi}{2}\right) = -r < 0$ から $g(\alpha) = 0$ となる α が $0 < \alpha < \frac{\pi}{2}$ にただ 1 つ存在する。

そして, $f'(t)$ と $g(t)$ は符号が一致するので, $f(t)$ は, 増減が右表のようになり, $t = \alpha$ で最大となる。

すると, 条件から $\alpha = \frac{\pi}{4}$ となるので,

t	0	...	α	...	$\frac{\pi}{2}$
$f'(t)$		+	0	-	
$f(t)$		↗		↘	

$$g\left(\frac{\pi}{4}\right) = \cos \frac{\pi}{4} \left(1 + \cos^2 \frac{\pi}{4}\right)^{\frac{3}{2}} - r \sin \frac{\pi}{4} = 0, \quad r = \left(1 + \frac{1}{2}\right)^{\frac{3}{2}} = \frac{3}{2} \sqrt{\frac{3}{2}} = \frac{3}{4} \sqrt{6}$$

[解説]

微分と増減についての標準的な問題です。ただ, $g(t)$ が単調減少であるのは形から明らかでしたが, 習慣から, つい $g'(t)$ という余計な計算をしています。

5

問題のページへ

(1) 3以上の素数 p , 自然数 m, n に対して, $(m+n\sqrt{p})(m-n\sqrt{p})=1$ より,

$$m^2 - n^2 p = 1 \cdots \cdots \textcircled{1}$$

すると, $m^2 = n^2 p + 1 \geq 1^2 \cdot 3 + 1 = 4$ から, $m \geq 2$ となる。

さて, 条件より, 互いに素な自然数の組 (x, y) に対して,

$$m + n\sqrt{p} = \frac{x + y\sqrt{p}}{x - y\sqrt{p}} \cdots \cdots \textcircled{2}$$

②を同値変形すると, $(m + n\sqrt{p})(x - y\sqrt{p}) = x + y\sqrt{p}$ となり,

$$(mx - npy - x) + (nx - my - y)\sqrt{p} = 0$$

m, n, x, y は自然数, \sqrt{p} は無理数なので,

$$mx - npy - x = 0 \cdots \cdots \textcircled{3}, \quad nx - my - y = 0 \cdots \cdots \textcircled{4}$$

③より, $(m-1)x - npy = 0$, $y = \frac{m-1}{np}x \cdots \cdots \textcircled{5}$

④より, $nx - (m+1)y = 0$, $y = \frac{n}{m+1}x \cdots \cdots \textcircled{6}$

ここで, ①から, $\frac{m-1}{np} - \frac{n}{m+1} = \frac{m^2 - 1 - n^2 p}{np(m+1)} = 0$ なので, ⑤と⑥は一致する。

よって, ②を満たす互いに素な自然数の組 (x, y) は,

(i) $\frac{m-1}{np}$ が既約分数のとき $(x, y) = (np, m-1)$

(ii) $\frac{m-1}{np}$ が既約分数でないとき

np と $m-1$ の最大公約数を g ($g \geq 2$) とすると,

$$(x, y) = \left(\frac{np}{g}, \frac{m-1}{g} \right)$$

(i)(ii)より, ②を満たす互いに素な自然数の組 (x, y) は,

$$(x, y) = \left(\frac{np}{g}, \frac{m-1}{g} \right) \quad (g \text{ は } np \text{ と } m-1 \text{ の最大公約数})$$

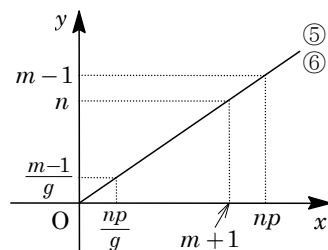
(2) (1)と同様にして, $m+1$ と n の最大公約数を h とすると, ②を満たす互いに素な自然数の組 (x, y) は,

$$x = \frac{np}{g} = \frac{m+1}{h} \cdots \cdots \textcircled{7}, \quad y = \frac{m-1}{g} = \frac{n}{h} \cdots \cdots \textcircled{8}$$

さて, x が p で割り切れないとき, ⑦から $xg = np$ なので g は p の倍数となり, k を自然数として $g = kp$ とかける。

すると, ⑧から $y = \frac{m-1}{kp}$ となり, $m = ykp + 1$ すなわち m を p で割った余りは 1 である。

また, 逆に m を p で割った余りが 1 であるとき, l を自然数として $m = lp + 1$ と



かける。すると、⑦から $x = \frac{lp+1+1}{h} = \frac{lp+2}{h}$ となり、

$$xh = lp + 2 \cdots \cdots \textcircled{9}$$

ここで、 x が p で割り切れるとすると、 j を自然数として $x = jp$ とかけ、⑨から、

$$jph = lp + 2, (jh - l)p = 2 \cdots \cdots \textcircled{10}$$

ところが、 p は 3 以上の素数より⑩は成立しないので、 x は p で割り切れない。

以上より、 x が p で割り切れないことと、 m を p で割った余りが 1 であることは同値である。

[解説]

約数・倍数の関係が絡んだ整数問題です。①のもとで、②と⑤が同値、または②と⑥が同値ということに着目しつつ、直線⑤、⑥のイメージ図を参照しながら解答例を作成しました。